

タ リ タ ・ ク ム

“Talitha, koum”

「少女よ、私はあなたに言う。起きなさい」(マルコ5:41)

日本聖公会 正義と平和委員会・ジェンダープロジェクト

第17号

2011年10月25日

〒162-0805

東京都新宿区矢来町 65

日本聖公会管区事務所気付

正義と平和委員会

・ジェンダープロジェクト

TEL03-5228-3171

発行責任者: 大岡左代子

「新しい言葉で礼拝を」

山口 里子

(日本フェミニスト神学・宣教センター共同ディレクター)

9月18-19日に長野で開かれた「女性フォーラム」で、私は講師として、「新しい聖書の学び: マグダラのマリアと出会い直す」と題して、かなり濃密で刺激的な(?)話をさせていただきました。マグダラのマリアは、イエス処刑後の危機の時に、絶望してしまわず、勇気と希望を持ち続け、卓越した指導力を発揮して生き抜きました。そしてイエス運動の奇跡的な継承を先頭で担い、キリスト教誕生への道を拓きました。

しかしこのようなキリスト教の恩人と言うべき第一の使徒、大聖人に対して、その後の父権制化した教会は、マグダラのマリアが男性ではないというだけの理由で、驚くばかりの不正と暴力を振るってきたのです。フォーラムでは、聖書正典、外典、ダヴィンチコードのテキストを分析・吟味することで、その足跡を辿り、歴史に生きたマグダラのマリアと出会い直し、教会の闇の歴史という現実にも向き合う学びをしま

した。

今回の女性フォーラムは、東京教区の集会と日が重なったようで、参加者が少なく残念でしたが、なごやかな雰囲気の中で、学びの分かち合いの一時と戸隠の散策を持たせていただいたことを、感謝しています。

また、私にとって大変嬉しかったのは、『こころを神に わたしたちのいのり集』を活用して後藤香織司祭と金善姫司祭が用意なされた礼拝でした。多くの礼拝で、男性中心の言葉づかいが溢れていて、言葉の暴力にさらされている感じがするのですが、フォーラムの礼拝は、配慮された言葉づかいが溢れていて、ほっとして心静かに祈る時を与えられた思いでした。野の花や安全な食材などのお心遣いも癒しの効果を高めてくれました。

そこで私は、聖公会神学院で講師として担当していた授業を思い出しました。ゼミのクラスでは、学期の終りに学生たちが創ったリタジーをするのですが、その前に、

リタジーで用いる聖書箇所、聖歌、祈りの言葉が印刷されたものを皆でチェックします。つまり、授業で学んできた知識を基に、問題と思う言葉遣いをより良い表現に直していくのです。そうして、皆の輪の中に花やキャンドルを飾り、心安らかに心ゆたかに祈れるリタジーをして、一つの学期を締めくくりました。聖書の学びが礼拝にしっかり生かされる楽しいひとときでした。

礼拝は、私たちが神と新しく出会い直し、神との関係、人との関係、世界の様々ないのち、自分自身に与えられたいのちなどについて、深い思い巡らしへと導かれる大切な時です。そこで特に神に対して用いられる言葉は、私たちの神イメージに大きな影響力を持ちます。現在、多くの礼拝では、神イメージが圧倒的に男性に偏っています。私たちは、文字の読み書きに無縁だった信仰先達が思い描いていたであろう多様な神イメージを失っただけでなく、ヘブル語聖書（旧約聖書）にしっかり残されている神の多様な女性イメージさえも、失ってしまったかのようです。

そうした女性イメージの一つが、「エル・シャーダイ」という名で呼びかけられる神のイメージです。これは「全能の神」と訳されていますが、「エル・シャーダイ」にそのような意味はありません。語源・語義に沿うならば「(私の)乳房の神」が一番近い表現だと思われます。実際聖書では、「子孫を増やし繁栄させる」というような文脈で「エル・シャーダイ」が多く用いられています。古代社会では、厳しい労働で妊娠は少なく出産は危険なうえに、お乳が不足が

ちでせつかくのいのちが亡くなることが少なくありませんでした。そのような社会では、幼くか弱いいのちの傍らで「乳房の神」への熱い祈りがどれほど多くなされたことでしょう。

現代の私たちが、このような神イメージを礼拝の中に取り戻すことは、聖書の歴史を担って生きた人々、特に女性たちとその子どもたちの生身の体や生活に思いをはせる機会を持つことに繋がるだけではありません。今この時に、栄養不良で亡くなっていく世界中の子どもたちとそのまわりの人々の生身の体や生活に思いをはせ、神に創られた人間世界の正義と平和に向けて具体的に思いを深める礼拝を形作ることに、繋がることでしょう。

ブライアン・レン (Brian Wren) という人は、神を「主、父、王、支配者」などの言葉やイメージで呼びかけ続けてきた教会は、この世界で高い身分・権力を持つ男性のイメージに神を閉じ込めるだけでなく、この世界で権力を持つ男性に従う人間関係が無意識に「自然」と感じる精神構造を作ってきたと学び、新しい言葉遣いの必要を痛感しました。そして神を多様なイメージで思い描けるように、これまでの言葉遣いを避けた新しい賛美歌を沢山作りしました（それらの幾つかが日本語に訳されていますが、原文に無い、著者が意識して避けた「主」が使われているのは実に残念です）。

私たちは、言葉をもっともっと大切に、気を付けて使いたい。そして、新しい言葉で、新しい賛美歌で、新たな出会いへと導かれる礼拝を作っていきたいものです。

もっと知りたい方のための参考書：

1. 山口里子『新しい聖書の学び』新教出版社、2009年。
2. アン・グレアム・ブロック『マグダラのマリア、第一の使徒一権威を求める闘い』吉谷かおる訳、新教出版社、2011年。

国際聖公会青年ネットワーク | AYNに参加して

ジェンダープロジェクト 小林 聡

アングリカン・コミュニオン（全聖公会）にはいくつかのネットワークがあって、それぞれに関心領域があり活動しています。ここでご紹介するのは国際聖公会青年ネットワーク（International Anglican Youth Network）というもので、私は各管区青年担当者の集まり【2011年8月13日（土）～18日（木）：香港】に参加させて頂きました。

青年に関わる課題を話し合うのですが、その議題の一つに「**Ending Violence Against Young Women and Girls**」があります。これは2010年から一年間を国連が青年年として位置づけており、それを受けて全聖公会の各ネットワーク【聖公会には課題ごとに10のネットワークがある。例えばIAWN（聖公会国際女性ネットワーク）やAPJN（聖公会正義と平和ネットワーク）など。】が共通の課題としている「女性・少女に対する暴力を撤廃する」ためのキャンペーンの一つとしてIAYNが取り上げてきたものです。青年ネットワークはこのキャンペーンの為に、自

らワークショップの資料を作り、青年たちとこの問題を分かち合うように各教区に呼びかけてきました。今回青年担当者会議に参加して私自身が感じたことは、この問題が教会の外で起きている問題ではなく、教会の中で起こり続けてきたことであり、現在教会が直面している深刻な問題であるということです。今後、日本の青年プログラムの中に積極的に暴力防止のためのワークショップを盛り込むことや、他のネットワークと共に共通の課題としてどのように取り組んでいけるのかを考える必要があると思います。それの一つにはネットワーク間をまたがる人の動き、顔の見える関係を通じた協働を実現していくことだと思いました。実際IAYNのメンバーは他のネットワークとのつながりを持っていませんし、IAYNに他のネットワークの方が参加することはありませんでした。今後、垣根を越えて協働していくことが暴力撤廃の一步につながると思いますし、

だけで何事もなく、投票用紙を渡されていました。しかし、わたしが生年月日を言うと、「これはあなたの入場券ではありませんね。」という言葉が返ってきました。わたしは「生年月日が違っていましたか？」と聞くと、間違っていないと言います。では、どうしてわたしのでないと言うのか尋ねると、「あなたは女性でしょう」と言うのです。この後、本人だと証明できる書類を持ってくれば投票が出来るという担当者に、異議を申し立てて、やっと投票が出来たのは1時間も後のことでした。

こんなことを毎回経験しなければならないのは、たまりませんので、始めから選挙に行かないのが、残念ながらトランスジェンダーの少なくない解決策です。

選挙は頻繁にはありませんが、病院や銀行、その他、身分証明書を求められる場面で、外見と名前が示す性別が食い違っていると、怪訝な顔をされることは日常茶飯事です。

たとえトランスジェンダーでなく、そして自分の名前に嫌悪感がなかったとしても、そんな状況に置かれたら、自分の名前を変えたいと思わないでしょうか？

名前を付けてくれた人には申し訳ないと思いますが、わたしは男の時の名前が好きではありません。ときどきわたしの昔の名前をわざわざ口に出す人がいますが、それはわたしにはとても不快なことです。好きではない名前を使うことによって起こってくる、沢山の煩わしさから解放されたいと思うことは、そんなに分別のないことなのでしょうか。

自分には理解できないことだからこそ、馬鹿にして見下す前に、どうしてそうなのか考えて欲しいと思います。皆さんにとっては煩わしくない、男女二分法の社会の当たり前でわたしたちトランスジェンダーが感じるしんどさが、少しでも軽減されるように。

※「投票所入場券」：自治体によって多少呼び方が違いますが、選挙人に対し選挙が行われることをお知らせし、投票所で選挙人名簿の本人確認をスムーズに行うために送付するものだそうです。現在は、この入場券自体には性別の記載が無くなっていますが、名簿に性別が記載されおり、外見の性別が違くとスムーズには投票できないのが未だ現実です。



第19回 聖公会女性フォーラム 開催される

□9月18～19日、中部教区、長野聖救主教会を会場に、各地からの約20名の参加者を得て聖公会女性フォーラムが開催されました。女性フォーラムは、女性の司祭按手の問題をきっかけに始まった 聖公会女性の草の根の集まりです。祈りと賛美とともに、毎回、テーマに沿って聖書の学びや分かち合い、「井戸端会議」などを行ってきました。今年は、中部教区の後藤香織司祭と金善姫司祭が中心になって長野聖救主教会の皆さまのご協力の下、準備が進められ、講師に山口里子さん（日本フェミニスト神学・宣教センター共同ディレクター。聖公会神学院でも講師を務められました。今号では巻頭言もお願いしました）をお迎えし、「マグダラのマリアに会い直す」というテーマで2日間、濃い学びのひとときを持ちました。

主なプログラム

開会礼拝、夕食と交わり、これまでの女性フォーラムの分かち合いと自己紹介、「新しい聖書の学び：マグダラのマリアに会い直す」① 正典・外典の分析から。②ダ・ヴィンチ・コードの分析から など）閉会の祈り
+オプションで 松代大本堂の見学



以下文中とも写真撮影/提供は、後藤香織司祭

聖公会女性フォーラムに参加して

佐々木 靖子（京都教区）

もう何年前のことでしょう。女性フォーラムというのは「特別な女性」が集まる会議のように感じていた私は、参加することを躊躇していましたので、お世話係に質問しました。「女性フォーラムへの参加資格ってあるんでしょうか?」。答えは「このフォーラムに参加したいって思う人は誰でも、よ」でした。参加したいと思うことだけが参加資格だという会議、この答えに私はとても新鮮なものを感じた覚えがあります。気後れが完全に払拭されたわけではありませんが、それでもこの言葉は私の心をちょっとだけ前に押し出してくださいました。けれども私の周囲には、このフ

ォーラムは特別な女性の集まりという感じがするといって、参加を躊躇しておられる方もあります。この感覚をどのように払拭することが出来るでしょう。やっぱり丁寧にお誘いして、参加していただくことでしょうか。私の場合は何度か参加することによって人と出会い、その出会いがフォーラムに行ってみようかなと思う力になっているような気がします。

今回私は、「新しい聖書の学び：マグダラのマリアに会い直す」というテーマに惹かれて、このフォーラムに参加することにしました。パソコンに向き合い長野聖救主教会(開催地)を地図で探し、教会にでき

るだけ近い、できるだけ安いホテルを探し。結果、タクシーの運転手さんによると「北海道で言えばすすきのみたいな所」の真ん中にあるホテルに、ご一緒した三人で泊まりました。電車はジパングを使って、時間がかかるけれども楽な直通を選び、開会までたっぷりあった時間を利用して近くの東山魁夷館にも行けました。自分で選んで行動することの面倒くささと面白さ。引っ込み思案だった私がこんなことができるようになったのは、与えられた機会に尻込みする私の背中を押してくださった方々がおられて、少しずつ学習できた結果だと感謝しています。機会が与えられ、周囲に少し助けがあつて踏み出せれば、自分を少し広げることができる。赤ちゃんが独り立ちする時のようです。

さて一日目、夕食後の自己紹介では皆さんよくお話になりました。自由に警戒感なしに話されたのではないのでしょうか。ここは言いたいことを自由に言えるところ。教会の中では必ずしも保障されていない側面かもしれません。「ここに来て喋って、また1年間教会で頑張れる」と言われた方がおられましたが、何となくわかる気がします。

二日目、「新しい聖書の学び：マグダラのマリアに出会い直す」は山口里子さんの講演。「眠くならないように緑茶でもお紅



茶でも持ち込んでいいですよ。眠らないで聞いてくださいよね」と言われてちょっと緊張。しかし実際には眠くなる暇も、遅筆な私はノートをとる暇もないほど興味深いお話。(詳しい内容については、アン・グレアム・ブロック『マグダラのマリア、第一使徒：権威への闘い』吉谷かおる訳、山口里子『新しい聖書の学び』などの本が出ているようですのでご参照ください)

私たちが十数世紀見続けてきたマグダラのマリアの絵の下に、塗りつぶされていたもう一枚のマグダラのマリアの絵が浮かびあがってくるような。あるいはモザイクがかかった絵の間からチラッと見える絵の断片、それをつなぎ合わせて浮かびあがってくるマグダラのマリアをみるような。その断片は正典福音書の中にあつたり、外典から探られていたり。

お話から浮かび上がった私のマグダラのマリア像は、イエスがとても愛した弟子、イエスとその真理を最も多く語り聞かせた人、深い洞察力によってどの弟子よりもイエスを理解した人。いのちの危険をも顧みずに可能な限り十字架のイエスの近くにいてその死を見届けた人、イエスの復活の証人であり、大胆にイエスの真理を語った人でしょうか。

そのマグダラのマリアについて、山口里子さんは終りに次のように言われました。「キリスト教は、いわば自分たちの存在の根底を、マグダラのマリアと女性たちの宣教の業に負っている。「使徒たちの中の使徒」「大使徒」「大聖人」としての名誉は、マグダラのマリアと女性たちに帰されて当然。それにもかかわらず、或いはそれだからこそ、2世紀以後、そして更に4世紀以後は国家権力を使って決定的に、教会は

女性を迫害した。男性の指導権威だけを主張して女性の指導的活動を「異端」として排除する父権性化の歴史が長く続く中で男性たちの働きを「女性らしい」奉仕で支えたのが女性たちだと教えられてきた。しかしそれは歪められた歴史。(略)マグダラのマリアを主体的な女性として、イエス運動をキリスト教誕生へと奇跡的に導いた卓越した指導者として、深い敬意と感謝を持って記念し、キリスト教の歴史に正義を回復していく希望を共々に新たにしたい。」

マグダラのマリアと女性たちが、教会の歴史の中で歪められて伝えられてきたことを学びました。ただフツと思うのです。彼女たちは、自分たちが正当に評価され、キリスト教誕生への道を切り拓いた「教会の指導者」として歴史の前面に躍り出たいと思っているだろうか。彼女の実像は違うかもしれないが、たとえマグダラのマリアが娼婦だと言われ続けたとしても、イエスにとって娼婦であることは差別の対象では全くない、人間の尊厳を傷つけるものでは全くないわけで、彼女にとってはどうということもなかったかもしれないと思うのです。彼女が「使徒たちの中の使徒」であったとしても、娼婦だったとしても、み

じんも変わらない人間の尊厳を説いたイエスの真理が伝えられることのほうが、マグダラのマリアにとっては大切であった気がするのです。逆に、彼女のことを書きかえざるを得なかったその人たちが、イエスが最も戒めた差別と不正義とを、教会の歴史の中にもたらしてしまったということになるのでしょうか。そのことにこそ、マグダラのマリアと女性たちは、深いいきどおりと悲しみと傷つきを持ったのではないかと思うのです。この傷つきをしっかりと心に留め、その回復のために努力すること、それは今を生きる私たちのなすべきことなのかもしれません。

山口里子さんは、ヨハネ福音書の背後にいて内容を証言した者はマグダラのマリアかもしれないと言われました。もう1度ゆっくりヨハネ福音書を読み、聖書に聴いてみたいと思っています。



参加者の感想から

会場や礼拝堂のきれいな野の花、身体にやさしい夕食のお弁当、長野名物のおいしい果物やトマト・・・心もからだも満たされました。

今度来たら美味しいおそばをゆっくりと食べたいです。

みんなに会えてよかった！元気がでた。思い切って参加してよかった。

危機的な状況の中で、あきらめずに生きたマグダラのマリアに出会い、勇気をもらいました。

Girls Friendly Society 世界会議参加者からの報告

1875年、英国聖公会内に発会したGFSは、日本では1916年（一説には1918年）に米国宣教師ミス・マッギルによって平安女学院に紹介されたのが始まりで、その後学校や教会などで「愛友会」として活動していました。戦後は、米国聖公会のバックアップを得て新しい歩みを始め、1959年の日本聖公会宣教100年の年には第1回全国総会が開催されました。現在では、各支部ごとの活動をベースに、全国的な組織、また世界的なネットワークを持つ女性の信徒の活動として今日まで続いています。（引用参照『新しい天 新しい地—日本聖公会 女性の司祭按手10年感謝記念誌』より）今回、3年に1度開催される世界会議に、日本聖公会から参加された高木泉さん、松村希さんのお二人に参加の感想をお寄せいただきました。

（写真撮影／提供：高木泉さん、高木和枝さん）



（中央左：高木 泉さん、右：松村 希さん）

去る6月、アイルランドにてGFS世界会議が行われました。GFSとは、Girls Friendly Societyの頭文字をとったもので、産業革命時代のイギリスで、困難のなかにある女の子たちに寄り添って歩くために設立されました。以来、世界各国の聖公会に広まり、その国や地域に合った活動がなされています。世界会議は3年に一度行われており、今回はウェールズでの開催となっています。

私は今回で2回目、3年前の韓国が初めての参加でした。韓国でできた友人や、GFSの母たちに会えることを楽しみに、今回ジュニア代表として参加してまいりました。ジュニアの代表として参加するために、北海道のGFSリーダーの方々と札幌で集ま

GFS 世界会議に参加して：

祈りにつながる世界の輪

北海道教区

マカリオス・ロダ 高木 泉

ったのが、3月11日。東日本大震災の日です。海外のGFSのメンバーからも続々と、日本の私たちの無事を案ずるメッセージやお祈りが届きました。そしてとくに福島原発事故に対し、私が知っている日本の情報についても詳しいメールをうけとり、海外の関心の強さを実感していました。6月初頭、東京にて世界会議のための参加者の顔合わせ・話し合いをした際、笹森田鶴司祭に、東北に赴き、実際に自分の目で見て、見たこと感じたことを世界に伝えてはどうか、と進言をいただきました。次の週、仙台の「いっしょにあるこう！プロジェクト」オフィスと、釜石の信愛保育園を訪れ、それぞれのスタッフの方に被害の現状を見させていただきました。テレビで見ているとは全く違う感情が私を襲い、それか

らしばらくは眠れなかったことを今でも思い出します。

世界会議では各国が「カンントリーレポート」として、その国の活動状況を発表する場が設けられています。今回、日本のカンントリーレポートに、日本GFSの活動と合わせて、東日本大震災の現状報告、そしてお祈りに対する感謝を発表してきました。発表する前まではとくに感情に震えはなかったのですが、マイクを持って、



震災について、また聖公会の犠牲者の方について話す場面になったとき、自分でもわからないのに涙が出てきて話すことができなくなってしまいました。どうしたんだろう。その時はわかりませんでした。何か月か経って思い返した今、ようやく理由がわかったような気がします。テレビで見ていたあの災害を自分の目でみて、そのことを消化する前に海外へ行ったからでしょうか、やっとあの場で、大切な一人ひとりの命が奪われたこと、今でも困難の中にいる人がいて、助けを必要としていること、そんなようなことが込みあがってきた



のだと思います。発表を終えたあと、たくさんの方が隣に来て、日本にいるみなさん一人ひとりのためにお祈りするわ、と涙ながらにおっしゃっていました。私はずっと、あれほど被害をうまく伝えられるか不安に思っていたのですが、結局は言葉ではなく、想いを強くもつことで伝わったのだと思います。それはもちろん私だけではなく、みなさんの心が日本へ、また私たちへ向いていたことも大きいと思います。

夜、各国のジュニア代表が集まって、話し合いをしました。自分たちが抱えている思い。GFSへの希望、目標。自分たちの未来について。南アフリカでは、GFSはGBFS、ガールズに加えボーイズも一緒に活動している、とのことでした。これは南アフリカでの文化的習慣にならったのことだそうです。ジュニア代表のゾーイは、「女の子も男の子もなにかを必要としているなら、一緒になってそれを探することに意味があると思う。見つからなくてもいい。一緒に探すこと、それが私たちにとっては大切なもの」と言っていました。

先日、日本聖公会北海道教区では原発に関する講演会を開きました。チェルノブイリから福島まで、放射能と生きることについて、深い学びのときを持ちました。その講演会の中で見たチェルノブイリの写真の中の子供の目は、福島原発事故の後改めてみると、今までとは違ったメッセージを私に伝えてきました。「もしあなたの子供が、わたしと同じ奇形として生まれてきたらどうするの?」と。もし私や、私の友人の子供が、奇形として生まれてきたら。それは今まで考えたことのないことでした。それでも原発に頼って生きるのか。もしそれがいやなら、なにをすればいいのか。私

たち昭和最後の世代、平成の世代はなにをすればいいのか。松村希さんとも、会議中夜遅くまで話していました。これから私たちはどうすればいいのか？福島の子供たち、お母さんたちに、なにがしてあげられるのか。今思い返すと、ゾーイがその答えを提示してくれていたように思います。まずは、一緒に探すこと。

今回の会議には、私の母もオブザーバーとして参加してくれました。10日間、英語だらけの環境で、私と希ちゃんに着物を着付けてくれ、体調管理や精神的な面で大きなサポートをしてくれました。今回の会議、もし母なしで参加していたら、きっとボロボロになっていたでしょう。ほかの参加者にも母子で参加している人たちがいました。母と子の絆。イギリスではじまった、女の子への支援も、きっと母親が子供を助けたい、守りたいという思いから始まったのだと思います。この、絆という、目には見えなくても強い接着剤は、今も日本

と世界との間に結ばれています。国家間で問題を抱えている国、日本は悲しいことに隣国韓国とも問題を抱えています。しかし私が韓国のジュニアの代表や、参加者の方々と話した時、そこには問題などありませんでした。お互いを理解しようとする心、お互いを愛する心があるからです。私たちがそれを持ち続ける限り、私たちは絆で強く結ばれています。

今回の参加にあたり、たくさんの方が私を支えてくださいました。日本のGFSのメンバーの方々、日聖婦の方々、私の北海道の、小さな教会のみなさん。私は今回、みなさんからのサポートを通して、新たに神様からの御恵みを授かりました。これからも、たくさんプロジェクトが動き出そうとしています。震災支援はもちろん、日韓の架け橋としてのフィリピンキャンプや、次世代のGFSリーダーの育成など、そのすべての働きに、みなさんのご支援と神様の愛がありますように。主の平和。

GFSの強さと頼もしさと広さ

中部教区 長野聖救主教会
ルシア 松村 希

2011年の6月にアイルランドで行われたGFS世界大会は、実は私にとって生まれて初めて参加したGFSの活動でした。現在も私はGFSのメンバーではありません。そもそも、恥ずかしながら私は23歳にもなってGFSがなんたるかを知らなかったのです。

私が幼稚園から小学校低学年の頃に、何度か少し年上のお姉さんたちが教会に集まってクッキーを作っているのを見た

ことがありました。なにをしているの？と聞いたら、GFSの活動なのよ、と教えてもらった思い出があります。そうして、私の中では教会内のクッキーを作るグループ=GFSという解釈になった訳ですが、まさかそのGFSが世界規模の組織であり、壮大な背景と歴史を持ち、世界中で活動を展開をしているとは思いませんでした。

ちなみに、私のいた長野の教会もGFS

の活動でフィリピンキャンプなどをしてアクティブな時期があったそうです。しかし、現在は中部教区の GFS は活動休止状態であること、また中部以外にも同様の状態の教区があることを聞きました。

そんな私が 10 日間で感じてきたことを書きます。

まず、何よりも GFS というネットワークの力強さ、頼もしさを感じてきました。

例えばの話ですが、海外で大きな災害が起きたときなど、急に世界に目を向けるということは、人によっては漠然とせずぎいて大変なことではないかと私は思います。私の場合も想いを巡らせてみても想像力が足りず、よくわかんないな、と感じることがたまにあります。そして、目を向けても、そこから情報を得るには少し手間がかかるかもしれません。そんな中、多くの出会いのうちに、様々な議題・問題に触れられた今回のような集いは、私にとっても、おそらく他の参加者にとっても、世界をどうとらえるかという視点における新しい切り口を得る機会になったように思います。

今回の世界大会では東日本大震災の支援のためにファンドが作られることが決定しました。私たち日本人の参加者は、あらゆる場で東日本大震災について質問されることがあり、ジュニアデリゲートの高木泉さんによる日本のスピーチも震災について多く触れました。ある参加者にとっては自分と同年代の、またある参加者にとっては自分の子どものような、ある参加者にとっては孫のようなメンバーが涙ながらに震災後の日本の現状を語る姿は、多くのことを考えるきっかけとなったはずです。また、政府の発表には

目を留めない海外の方も、同じ GFS メンバーからの発信であれば興味を持ち、祈り、何か行動につながるかもしれません。

日本の GFS は今メンバーが少ないから震災後、サポートのためになにができるのか、と悩んでいらっしゃるのを聞いたことがあります。しかし、世界大会の場であの強烈なスピーチをして、各国・地域の参加者に事実を伝え強い衝撃を与えたというだけで日本 GFS は支援のためにまず大きく動いたと言えると思います。

顔の見える場で言葉を交わすと言うことは、とても刺激的でなによりもパワフルだと痛感しました。今回の震災に限らず、今後何か起きて、この繋がりはまたすばらしいパワーを発揮するのだと思います。

私は、現在「日本聖公会東日本大震災被災者支援いっしょに歩こう！プロジェクト」のスタッフとして活動させていただいていますが、この GFS が持つ世界へのネットワークと、女性の視点はとても心強いものです。きっと、東北の女性のために、子どものために、弱い立場にある方々のために何かアクションを起こしたい方が国内にも海外にも沢山いるはず。ぜひ、GFS らしいサポート活動をプロジェクトといっしょにしたい、と強く思っています。



また、「あ、やっぱり GFS は世界規模なんだな、広いな」ということもしばしば感じながら過ごしました。例えば国や地域ごとに抱える問題や活動の方向性が様々で、それはそれぞれの持つ事情や背景が異なるので当たり前のことなのですが、GFS はみんなクッキーを作ると思っていた私にとっては新鮮な驚きでした。女性の教育、就労支援をする国・地域があったり、日本はメンバー不足に悩んでいたりと、教会の中に矢印を向けて活動するスタイルの地域もあれば、教会の外に発信することに特化しているところ、また、行政の働きを GFS がフォローするという方法をとっている国もありました。

また、期間中、何度か全員で礼拝をお捧げしましたが、全員参加の礼拝では、同じ式文を用い同じ楽譜で聖歌を歌っているのに、それぞれの地域の持つ雰囲気がいじみ出ていてとても面白かったです。手拍子やダンスをする国もあれば、声の大きさ、高さ、張り、身体の動かし方に特徴があったり…。同じ聖公会の中にある様々な祈りの形に触れられた気がします。

多くの方々のお支えがあり、多くの気付きがあり、神様に守られて過ごした 10 日間でした。世界会議を通しての交わりに、神様のお恵みに感謝します。

南インド タミルナドゥ州「WOLD」をたずねて

大岡左代子（京都教区）

8月17日～25日、ニームの会（※）が主催する「南インドのタミルナドゥ州にある女性の解放と発展のための組織<WOLD>を訪ねる旅」に参加しました。ニームの会のこの旅の目的は、「連帯」。それぞれに状況は違っていますが、女性たちはそれぞれの場でまだまだ困難を抱えていることがあります。日本人がインドで差別されている女性たちを憐れむために行くのではなく、対等な関係でお互いにエンパワメントするために出会うのです。私自身は、2008年に訪れた時も、今回もこの関係性の大切さを実感した次第です。

ツアーの中で私たちは、WOLD とネットワークを持ちながら活動している女性の話を聞いたり、現地の村に入りダリットの女性たちの現状を聞くことができました。WOLD と協働して働いている女性たちの一人であるアンソニー・メリーから聞いた話。アンソニーは、1980年に女性の自立支援のための NGO「AWARD」を立ち上げ、WOLD ともネットワークをもって地域で活躍されており、今は息子さんがその仕事を手伝ってくれています。また、彼女は、2006年の州の選挙に出馬。彼女はローマ・カトリックの信徒で、181の村に約1000グループのクリスチャン・ダリットの女性たちがいて票が集まると期待したけれども、結果的にそれらの票は彼女に集まらな



WOLD で他の NGO の女性の話をきく

ったそうです。その要因の一つは、ダリット女性たちが NGO に求めているものは「どれだけ自分たちにサービスをしてくれるのか」ということ。政治を変えるということよりも「今、必要なものをどれだけ与えてくれるのか」ということが期待されていることなのです。それだけ、生活が大変だということを表しているのかもしれないけれど、本当は社会の構造、しくみの中で抑圧されているダリットの生活を改善していくためには、政治がかわらないと変わらない、とアンソニーは言いました。2006年以降、経済自立以外の支援について政府が助成金を出さなくなったことは、本当の意味でのダリットの女性たちの自立を阻むものであり逆にいえば、2億人いるともいわれているダリットのパワーを恐れているということだと感じました。(因みにインドでは、議員を選ぶ制度にクォーター制度が導入されていて、ある程度の女性の議員の数は確保されるそ



現地スタッフと日本からの参加者

うです。ところが、その陰には男性の力が実際に議会にでてくるのはその夫であるというような、笑いたいけど笑えない現実があるとのこと。もちろん、法律違反ですが、みんなやっているので告発できないそうです。それくらい男性中心の社会構造であるということです。) また、アンソニーの活動に、教

会からの支援はあるか?と尋ねたが、「全くサポートはない」という返事が返ってきました。彼女たちは、教会のサポートはあてにしていません。それは残念なことですが、どの国も教会も男性中心の構造的な課題があることをある意味で納得したのでした。そんな中で彼女たちを支えているのは、家族や親族、友人であり、自分たちがダリットコミュニティが自立していけるようなモデルにならないといけないという信念である、と WOLD 代表のプレマは言います。また、海外の人々とのつながりも大きな支えになっているという。国内で孤立しても、外国にいる同じような境遇の人々との関係ができることがエンパワメントにつながるのだそうです。そのために、プレマは指導的役割を担っている人には、機会があるごとに海外へでていくことを勧めてもいます。そして、プレマもアンソニーも口をそろえて言うことは、とにかくリーダーの養成が大切であるということ。でも、そのことを阻害する要因は、カーストであり、ジェンダーであり、文化・習慣であるということでした。このことも私たちの現実とよく似た状況があると感じました。WOLD のスタッフであるマゲシュワリが住み、活動している村では、子どもたちの将来に何を期待するか?という私たちの質問に、母親たちは「子どもたちには学校の先生か公務員、専門職になってほしい」と口をそろえて言いました。生活の課題は、仕事がないこと、日々の糧を



ダリットの村の女性たちとの集会

得ること、土地がないために日雇労働しかできないこと、などであった。また、この村には（というよりほとんどの地域には）日本の幼稚園や保育所のように就学前の子どもを預かる施設がないために、母親は働きに行くこともできません。また、家にはトイレがなく、みんな野外ですることになる。そのためにサリーの下に下着をつけていない女性は病気にかかりやすかったり、夜トイレに行った際にレイプ被害にあう危険、コブラにかまれたりする危険があるという。彼女らの住んでいる村は、バスが通る道から大分畦道を入らなければならないので、歩くかバスに乗るしか交通手段のない人々は、コブラにかまれても、病気になっても病院へ行くには、バス停まで数十分歩かなければならない。ましてやそれが夜であれば、歩いていてもなお、コブラに襲われる危険や、レイプ被害にあう危険が潜んでいるという生活状況はどうすれば改善されるのか・・・とため息がでてしまいました。それでも、アンソニーやマゲシュワリが活動できるのは、夫の理解があり、彼女たちをサポートしてくれるからだそうです。女性が社会で活動するには夫の理解



街角でミシンをふむのは男性です

が不可欠・・・これはすばらしいことでもあるけれども、ここにも男性中心の社会構造を垣間見る気がしました。（とはいえ、日本でもこの状況は同じでしょうか・・・？）

ダリットとは、かつて不可触民と言われていた人たちのことでアウトカーストでありアンタッチャブルな存在とされている。1950年にインド共和国憲法が成立し不可触民制が廃止されたにもかかわらず、根強い差別は今も続く。カースト

制はヒンドゥー教のものであるため、教義上、クリスチャンやムスリムにはカースト制がないとして、クリスチャンやムスリムが公式の所属名とされるが、ダリット人口の大半が暮らす農村ではダリット・ムスリムやダリット・クリスチャンへの社会的排除と差別は根強い。そして、女性はさらに差別をうけています。インドの社会に根強くある文化と風習の中で一人ひとりの尊厳を大切に、社会のさまざまな抵抗に対しておそれず、怯まず闘っているプレマたちの思いの根底には、「人権は神様から与えられたものであり、全ての人が尊重される権利がある」との確信があると感じました。その彼女たちの姿は、聖書にでてくるフェニキュアの女性や、イエスの衣のふさに触れる女性など、さまざまな女性の信仰の姿と重なる。そのような思いに触れ、私自身が力をもらって帰国しました。



毎日美味しいカレーを食べました

インドの社会情勢や政治状況から考えると、ダリットの女性たちの意識が変わり自分で自分を

阻害することなく尊厳をもって生きることができるような社会の実現はそんなに簡単にやってくるとは思えません。それでもなお、彼女たちの存在を忘れず、祈り、連帯していくことが互いの活動の力になると私は信じています。

※「ニームの会」・・・関西にあるキリスト教女性センターのメンバーが構成する「WOLD」と連帯するための組織のことです。代表は山下明子さん。毎年、チャリティーコンサートやバザーを行い、その収益を「WOLD」の支援金として送っています。

ジェンダープロジェクトより

上野千鶴子著『不惑のフェミニズム』（岩波現代文庫）より少し引用します。

／男女共同参画社会基本法にふれて・・・『この法律の画期的なところは「違っていても対等」の男女特性論を否定したことである。「えーっ、男と女の違いがなくなるの。そんなの味気ない」と思っているあなた。誤解です。男と女というたったふたつの違いではなくて、もっとさまざまな違いがあつていい。問題はその違いがどちらかに有利もしくは不利に働かない社会制度をつくる、ということである。違っているのはあたりまえ。違いはふたいろではなくいろいろ。そう考えればジェンダー平等のゴールは、多様性の共存にこそある。』／ここから、ジェンダー平等とは女が男のようになることではない。多様性が尊重され、それぞれの尊厳が守られ生かされることだということを学びます。／聖公会の特徴は多様性の一致。／これが「性」が絡むとややこしくなるのはなぜでしょうか。／上野さんの言葉を借りるとすれば、ジェンダープロジェクトは「その違いがどちらかに有利もしくは不利に働かない教会制度」について考え続けたいと思います。

女性とは？

ジェンダープロジェクトでは、「女性」とはあらゆる社会構造の中で、立場が弱くされている人たちの一つのグループであるという考え方をしています。性の多様化の中、「女性」という表現自体が問題視されることもありますが、タリタ・クムで用いる「女性」という表現は、「女性」の視点を大切にしながらも、男女二分法にとどまった性別用語としてのみ理解されるより、包括的な意味で理解される事を意図しています。

正義と平和委員会

ジェンダープロジェクトとは？

教会におけるジェンダー課題の共有と克服のために、すべての人が尊重されるネットワーク作りをめざして活動しています。機関紙としてのニュースレター「タリタ・クム」の発行(年3～4回)、学習会の開催、出前ワークショップの実施なども行っています。一人でも多くの人が、ジェンダーの課題に関心を持ってくださり、共に考えていける場をつくっていきたく願っています。

タリタ・クムとは？

「少女よ、起きなさい」という意味のアラム語です。会堂長ヤイロの願いにこたえて出かけて行き、死にかかっている幼い娘の手をとって、イエスさまが言われた言葉です（マルコ 5：41）。今までジェンダーのために十分に発揮することのできなかつた女性たちのさまざまな潜在的な能力や感性や行動力が、神さまの祝福によって主の栄光をあらわすために、より生き生きと用いられますようにという祈りと願いをこめて名付けました。

<編集後記>今号も堂々の16ページに。原稿をお寄せくださった皆さん、ありがとう！